
一人より二人

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

一人より二人

【Nコード】

N1948E

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

事故で両親を失った華と翔太。二人で生きていこうと誓い合っが今度は翔太が事故に遭い。けれど今の華には。家族愛と男女の愛、二つの愛のお話です。

第一章

一人より二人

二人になつてしまった。一瞬にして。

お通夜の場で二つ並ぶ写真。それは二人の両親のものであった。

「お姉ちゃん」

そのお通夜の式の黒い中で。小さな小学校の制服の男の子がセーラー服の大人びた女の子に声をかけていた。小さく、か細い声で。

「お父さんとお母さん。もういないんだね」

「ええ、そうよ」

少女は。必死に耐える声で彼の言葉に頷いた。見ればその白く整った顔も必死に耐えているものであった。全身で耐えているのであった。

「もうね。ずっと」

「二人だけなの？」

「そうよ、もう二人だけなのよ」

少女は悲しみを必死に堪えつつ彼に答えた。

「私達二人だけになったのよ」

「そうなんだ。もうこれで」

「ねえ翔太」

ここで彼の名を呼んだ。

「何？」

「お姉ちゃん、もうすぐ卒業だけれど」

「うん」

「大学。行かないから」

強い声になつていた。決意して断ち切る。そんな声だった。

「働くから」

「折角大学受かったのに？」

「ええ。もう行けない」

一人より二人

また言うのだった。その声で。

「だからよ。お姉ちゃんが翔太のお母さんになってあげる」

「お姉ちゃんが僕の」

「だからね」

その言葉は続く。強く悲壮な決意が込められているがそれと共に優しく暖かいその声で。翔太に対して語るのだった。

「安心して。一人じゃないから」

「お姉ちゃんがいてくれる」

「お姉ちゃんにも翔太がいてくれるから」

自分に言い聞かせるような言葉であった。彼女とて辛いのだ。しかしそれを必死に堪えての言葉だった。悲しみも寂しさも不安も全部断ち切つて。そんな言葉であった。

「それでいいのよ。二人でね」

「わかつたよ、お姉ちゃん」

翔太はそこまで聞いてやつと頷いた。彼も決めたのだ。

「僕、お姉ちゃんの力になるから。華お姉ちゃんの」

「御願いな。お姉ちゃんも頑張るからね」

その黒く長い髪で顔を半分隠していた。大きくしつかりとした目と厚い唇が濡れようとしていた。しかしそこで踏み止まっていた。その顔でじつと弟のあどけない、天然パーマの下の顔を見詰めていた。雨の降り注ぐお通夜の中で。二人はこれから二人で生きていくことを決心したのだった。

それから華は働きだした。弟の為に朝早く起きて家事を行い昼から夜遅くまで働き家から帰っても家事を行つた。決して弟にひもじい思いや惨めな思いはさせまいと頑張り身を粉にして働いた。その為翔太はすすくすくと育つた。あの時はまだほんの小さな子供だったのに大きくなつて。ようやく高校に行けるまでになつたのであった。

「お姉ちゃん、高校だけねど」

「どうするの？」

「奨学金受けてたじゃない」

翔太は成績優秀だった。それで奨学金を受け取っていたのだった。これも姉に苦労させまいとする彼の心配りだったのである。

「それでね。行くつもりなんだ」

「そう、それを使うのね」

「うん、寮に入るよ」

こつこつも言うのだった。二人しかいない家の中で向かい合ってテーブルに座りながら。既に夜はかなりの時間になっていた。その中での話であった。

「それだとお姉ちゃんももっと楽になるしね」

「それは」

「いいんだよ」

にこりと笑って姉に告げる。その笑顔は幼い時のままだった。

「お姉ちゃんが楽できるからね。その方が」

「いいの？」

「僕がいつていうからいいんだよ」

彼のこの時の言葉もしつかりしたものだ。姉を安心させようという。そうした言葉だった。

「気にしないで。心配しなくていいから」

「そうなの」

「そうだよ。だから」

さらに言うのだった。

「僕も勉強頑張るからね」

「ええ、私もね」

自分を気遣ってくれる弟の為だった。くじけまいと思った。芯にあるその強い心で。

「頑張るわ。翔太の為にね」

「うん、頑張ろう」

「ええ」

笑顔で頷き合うのだった。二人きりの辛い生活だったが絆はしつかりとしたものだった。二人はそれを確かめ合い生きていた。そん

な中で華の側に一人の若者が出て来た。同じ職場にいる青年琢磨光平という男だ。背が高く眉が吊り上がった独特の顔をしている。身体は引き締まりその顔と合わせて非常に精悍な印象を持っている。そんな若者だ。

彼は明るく気さくだった。仕事のうえで一緒になると何かと華を助けてくれた。このことで色々と救われた彼女は次第に彼に想いを寄せるようになった。何時しかそれは彼女が今まで感じたことがない程にまで強いものになっていた。

しかし。ここで問題があった。翔太のことだ。彼女は弟のことを想いこれ以上想いを強くすることを躊躇っていた。しかしこのことを翔太にも光平にも言えず戸惑っていた。だがそんなある日のことだった。

「ねえお姉ちゃん」

休日の昼のことだった。華が作ったスパゲティを食べていると翔太が声をかけてきた。やはりここでも家の中のテーブルで向かい合って座っていた。昼なので薄暗さが残る灯りは点けてはいなかったが。

「何？」

「最近迷ってるでしょ」

「こっ姉に声をかけてきたのだ。」

「迷ってるって？」

「誰か好きな人ができたんだよね」

「ぶしつけにといった感じでこっ尋ねてきたのだった。」

「そうでしょ？当たってるでしょ」

「えっ……」

そう言われて絶句した。これはその通りだったからだ。こうした時に咄嗟に誤魔化しの言葉を言えるような器用さは。華にはなかった。

第二章

「それは……」

「だって最近」

翔太は絶句する姉に対して言葉は続けた。彼のペースになっていた。

「綺麗になったから」

「そうかしら」

「そうだよ。だからわかつたんだよ」

にこりとした顔で姉に言うのだった。スパゲティをフォークで食べながら。

「いいんじゃないの？」

「次の言葉はこうであった。」

「好きな人ができたらそれでさ」

「いいって」

一番気にかけていた翔太からの言葉だ。やはり戸惑わずにはいられなかった。

「どういうこと？いいって」

「だってさ。こういうのって僕が口出しすることじゃないし」

また姉に対して述べるのだった。

「好きにしたらいいよ、お姉ちゃんの」

「いいの？」

それを弟に対して断ろうとさえ思った。だが彼はそれに気付いているのかどうか分からないがそれより前に言ってきたのであった。

「それで」

「いいよ。お姉ちゃんもさ」

言葉は続く。

「もうそんな時じゃない。それに」

「それに？」

「僕だけじゃなくていいから」

こう述べるのだった。

「お姉ちゃんはお姉ちゃんの好きな人を好きになって。御願いだからね」

「それでいいのね」

「だからいいんだって」

今度は苦笑いになった。困ったような。

「それどころかそうなってもらわないと困るから」

「困るの」

「そう、困るんだよ」

こうも言うのだった。

「あんまり僕のことばかり気にかけて自分のことはいいなんて。そういうのって僕も嫌だから」

「だからいいのね」

「そうだよ。だから寮に入るんだし」

心配りはそこまで及んでいたので。あくまで姉を気遣っていたのだ。

「いいよ。というかそうして」

「わかったわ」

弟のその言葉に顔を上げた。それから笑顔で応えるのだった。

「じゃあ。そうさせてもらうわ」

「御願いだよ。もうお姉ちゃんも自由になって」

今度の言葉はこうであった。

「僕の為に必死にならなくていいからね」

「有り難う」

あくまで自分に心配りを見せる弟に礼を述べた。目を濡らしながら。

「じゃあ。いいのね」

「だからいいんだって」

また姉に対して告げたのだった。優しい顔で。

「そんなに気にしないでよ。お姉ちゃんだって幸せにならないといけないんだから」

「私も？」

「だってそうじゃない」

言葉は続く。あくまで姉を気遣うその気持が言葉になって出る。それであった。心がそのまま言葉となって出ているのであった。

「お姉ちゃんにはお姉ちゃんの幸せがあって」

「ええ」

「僕には僕の幸せがあるんだからね」

「そうなの」

「僕の幸せを今まで願って。頑張ってくれたんだから」
さらに告げる。彼の心をそのまま。

「幸せになって。いいよね」

「………いいわ」

スパゲティが少し辛くなったように思えた。塩辛く。しかしそれは気のせいではなかった。本当に塩辛くなっていた。それでも美味しく感じた。弟の心をそのまま感じ取ったからだ。

華は光平と付き合うようになった。彼は華の思った通りの好人物であり華のことを優しく守って慈しんでくれた。彼女はこのことに感謝しながらもうすぐ家を出るといふ翔太を育てていた。彼は見事高校に受かり家を出ることになった。それが決まったがしかし。思わぬことが起こるのだった。

翔太が高校に合格しささやかな祝い事をした次の日。弟の幸せに喜びながら通勤し仕事にかかりだした華のところへ。電話がかかったのだった。

「はい………え」

話を聞いて絶句した。その次に顔を蒼白にさせた。その翔太が事故に遭ったのだ。

「それで弟は………はい」

心を何とか保ちつつ話を聞く。交通事故に遭ったという。通学中

道を横切っているところに居眠り運転のトラックにはねられたのだ。無事を必死に尋ねる。しかし。彼女は入院先を告げられただけだった。

「それで……そうなのですか」

とりあえず命は助かったということだけは聞き出すことができて安堵する。しかし。上司に詳細を告げて会社を早退させてもらった。それからすぐにその病院に向かうと面会謝絶だった。そしてそこで弟のことを詳しく教えられたのであった。

「生きてはいるんですね」

「……はい」

初老の落ち着いた紳士といった外見の医師が出て来て彼女に告げた。しかしその顔は沈痛なものでありそれだけで弟の状況がわかるものであった。

「ですが意識はありません」

「意識が」

「頭部や脊椎、腰に損傷はなかったのですが」

華はそれを聞いてまずはまた安堵した。その辺りに怪我がなければまずは後遺症の心配はない。そのことにとりあえずはほっとしたのである。

第三章

しかし。医師の沈痛な顔を見て楽観はできなかった。不安を拭い去ることができずまた彼に対して問うのであった。今にも壊れてしまいそうな顔で。

「ですが」

「ですが!？」

「出血があまりにも多く」

「出血がですか」

「そうです。とりあえず輸血はしましたが」

それもまた華を安心させた。しかし医師の沈痛な顔は終わらない。彼はさらに言葉を続けてきたのだった。蒼白になっている華に対して。

「右手を失い」

「右手を」

翔太の利き腕をだ。彼はそれをなくしてしまっただ。

「その他の怪我も酷くおまけに跳ね飛ばされた際に木に当たりそこから破傷風菌が入ってしまったようなのです。血清は打ちましたが」

「破傷風………」

その恐ろしさは華も知っていた。傷口から破傷風菌が入ってなりそれにより死に至る病だ。手遅れになった際はあまりにも悲惨で苦しみ抜いて死ぬのである。恐ろしい病気だ。

「この三日が山場です」

「三日、ですか」

「破傷風は。あまりにも強いので」

医師は語る。その菌の恐ろしさを。

「血清が利けばそれで助かりますがそうでなければ」

「………そうですか」

「全力は尽くします」

それは保障するのだった。医師として。

「しかし。最悪の事態は覚悟しておいて下さい」

「………わかりました」

聞きたくはない言葉を告げられた。しかしであった。面会謝絶と
いった状況が何よりも雄弁にそのことを彼女に教えていた。それを
聞いて絶望に囚われる。崩れ落ちはしなかったがそれでも。絶望に
陥り病院の中の椅子の一つに座り込んで身動きできなくなった。も
う何も考えられなかった。

これまでのことが脳裏に思い浮かんでいく。まさしく走馬灯の様
に。楽しかったことも悲しかったことも両親が死んだあのお通夜の
時も。全て翔太の思い出だ。だがそれもすぐに消えていく。消えて
後に出て来るのは。絶望だけだった。何もかもが終わってしまった、
そうしか考えられなくなった。

その日はそのまま病院で一日を過ごした。気付いた時には椅子に
座り込んだまま眠っていて起きると肩から毛布がかけられていた。
病院の人の誰かがかけてくれたらしい。そのことにまずは感謝した
がそれでも絶望は消えはしなかった。その絶望の中で思い続けるの
は翔太のことばかり。必死に祈りだした。

そのままその日の午前中が終わった。何も食べられなかった。食
欲もない。しかしであった。その彼女に前から声をかけてくる者が
いた。

「華ちゃん」

「華………ちゃん」

「そうだよ、華ちゃん」

明るい声だった。それをかけてきたのだった。彼女に。

「大丈夫かな。ちょっと寄ってみただけけれど」

「その声は」

聞き覚えのある声だった。その声を聞いて顔をあげると。そこに
は彼がいた。

「光平さん。どうしてここに」

「話は聞いたよ」

多くは言わなかった。ただこう告げるだけであった。

「だから来たんだよ」

「ここになのね」

「うん」

「来てくれたの」

その心がわかる。だがそれでもその心は暗いままである。しかし。光平はそんな彼女にさらに声をかけるのだった。優しい声を。

「少し。出ない？」

「出るって？」

「うん。正直あれだよね」

言いにくいことだった。しかしそれでも。彼は言った。笑顔を作りながら。

「神様に御願いしないとして状況だよね」

「・・・ええ」

その言葉にこくりと頷く。正直に言ってそうだった。そんな状況だった。だから昨日のまた祈っていたのだ。祈り、さらに祈って疲れ果てて。このまま眠ってしまったのだ。

「ここでき。御願いするより」

「ここ」

病院で、という意味だ。

「お寺か神社に行こうよ。近くにいい神社を知ってるしね」

「そうなの」

「それにね」

さらに言うのだった。ようやくその顔をあげてきた華に対して。

「一人で祈るより」

「一人で」

「二人でお祈りした方がいいよ」

明るい笑顔で述べるのだった。まるで華を照らすように。

「二人でお祈りした方が」

「そうだよ。だからね」

また声をかける。

「行こう。一緒だね」

「一緒に」

「それでどうかな」

また声をかけてきた。彼の言葉を聞いて少しずつ心に光が差し込んできたように感じた。それはごく僅かであったがそれでもだった。完全な闇の中にあるのとは事情が全く違っていた。

「一緒に行くってことで」

「そうね」

また俯いてしまった。しかしその表情はこれまでとは違っていた。絶望の中に沈みきりただひたすら祈るものではなかった。希望を微かにであるが信じてみる。そんな顔だった。

「それじゃあ」

「それでいいんだね」

「ええ」

彼の言葉にこくりと頷いた。小さくではあるが。

「御願い。一緒にお祈りして」

「わかったよ」

光平が微笑むとそれが合図になった。二人は病院を出てそれから神社に向かった。神社は静かで落ち着いた雰囲気だった。社の周りには緑の木々がある。それを見ていると少しだけが気持ち晴れる気がした。たったそれだけのことで今華にとっては有り難いことだった。

「ここなのね」

「そうだよ」

光平が華に答える。彼は華の横にいた。

「ここがその神社なんだ」

「そう。ここが」

「お金。あるよね」

今度はこう彼女に尋ねてきた。

「お賽銭のお金。なかったらあげるけれど」

「貸す、じゃないのね」

「うん」

また頷くのだった。

「だって。華ちゃんだから」

「私だから？」

「そっだよ。華ちゃんだからね」

また言ってきた。

第四章

「あげるんだよ」

「私だからなのね」

「それじゃあ駄目かな」

今度はこう尋ねてきた。

「華ちゃんだからあげる。それで駄目かな」

「うっん」

その言葉に静かに首を横に振った。俯いてはいるが視線は上がってきていた。

「有り難う。それじゃあ」

「なかつたら、だよ」

少し笑つての言葉だった。

「あくまでね」

「あるから」

「あつたんだ」

「ええ。ここに」

そう言いながら着ている上着の裏ポケットから財布を出してきた。赤い財布だった。かなり使われているらしくその皮はかなり古いものだった。

「あるから。五百円」

「五百円？」

「それで駄目だったら千円でも。いいえ」

言葉を訂正した。そのうえでまた続ける。

「五千円でも一万円でも。それで神様が嫌だって言ったら今あるお金全部でも」

「出すんだね」

「それで助かるのなら安いものよ」

言葉は続く。華は静かだが真剣な面持ちで語るのだった。

「翔太が助かるのなら。それで」

「翔太君がだね」

「ずっと二人だったのよ」

これまでのことを一言で語った。二人だけで生きてきた。高校を卒業してすぐに働いて翔太を育ててきた。その何年にも渡ることを一言で述べたのであった。

「二人で。だから」

「そう。だから二人でね」

「何？」

「二人で。お祈りしよう」

顔を向けてきた華に対して告げてきた。優しい微笑みと共に。

「二人でね。いいかな」

「二人で」

「だから。それを言っていたじゃない」

優しい微笑みは続く。それは華にしつかりと向けられていた。その優しい言葉は少しずつであるが確かに華の心を包み込みだしていた。優しい言葉の中で華は思うのだった。

「二人で」

「そうだよ。一人より二人」

また語る。

「二人でお祈りしよう。一人じゃないよ」

「私……一人じゃないのね」

「絶対に一人にはならないから」

言葉をこう変えた。二人というのを。

「絶対に。翔太君だって」

「翔太は」

「一人でお祈りするより二人でお祈りした方がいいよね。じゃあ」

「わかったわ」

顔が上がった。そのうえで頷いたのだった。

「それじゃあ。私は」

「うん。病院を出る前にも言っただけね」

言葉が繰り返される。しかしそれはただの繰り返しではなかった。言葉は同じでもその含んでいる意味が違っていた。確実に変わっていた。

「二人でね。いいよね」

「ええ。それじゃあ」

「お賽銭。どれだけ出すの？」

「お財布にあるだけ」

微笑んで述べた。静かに。

「それで翔太が助かるのなら」

「わかったよ。じゃあ僕もお財布にあるだけね」

「いいの、それで」

「カードもあるから」

少し照れ臭そうに笑つての言葉だった。

「それでも困らないよ。安心して」

「わかったわ。それじゃあ」

「うん、お祈りしようね」

「ええ」

こうして二人はお賽銭を入れてそれから二人並んでお祈りをした。そのかいがあつてか翔太は何とか一命を取り留めた。右手はなくなつたがそれでも命は助かつた。暫く入院が必要であつたが。

「そうですか。助かりましたか」

「右手は残念ですが」

「それでも。助かつたんですね」

あの初老の医者に対して言う。助かつたというそのことを再び聞くのだつた。

「破傷風から」

「はい。それは確かです」

医者もそれは認める。助かつたというそのことだけは否定できなかった。

「ただ。暫く入院は必要です」

「そうなのですか」

「やはり怪我が酷かったですし」

理由はそれであつた。

「出血多量もかなりのものでしたし。それに」

「それに」

「右手のぶんですね、やはり」

右手のことがまた語られた。

「入学式は間に合いませんが。ゴールデンウィーク明けまでにはま
ず」

「学校にも行けるのですね」

「ええ。それは大丈夫です」

「わかりました。それなら」

それだけ聞いて満足した。ほっとした笑顔が続く。

「いいです。右手は私が何とかします」

「貴女がですか」

「そうです。私が右手になります」

静かな言葉だつた。しかしそれと同時に強い言葉だつた。芯の強
い、柳にも似た強さのある言葉であつた。華の心そのものの言葉だ
つた。

「だから」

「右手についてですが」

医者はその強い決意に打たれたのだろうか。華にたいしてあえて

明るいい声を作って述べた。

「義手があります」

「義手ですか」

「そうです。手は一本になりましたが」

右手がなくなつたからだ。結果としてそうなる。

「けれど。それで一本ではなくなります」

「二本に」

一人より二人

「手も一人では寂しいではないですか」
そう表現するのだった。彼もまた微笑んでいた。芯のある微笑み
だった。

第五章

「だから。義手を」

「そうですね」

「それで宜しいですね」

ここまで話してあらためて華に尋ねてきた。

「義手で」

「弟が何と云うかわからないですが」

「貴女はそれでいいのですね」

今は華の言葉を聞くのだった。

「義手で」

「ええ。私は」

異論はなかった。二人だと聞いて。その言葉だけでもう判断するのだった。

「それで御願いします」

「わかりました。それでは」

「お金は」

「ああ、それはいいです」

それについては明るい笑顔一つで打ち消した。

「いいとは」

「ある人がお話してくれまして」

「ある人？」

「ええ」

華の言葉に頷いてからの言葉だった。

「琢磨さんからですよ」

「あの人が」

「何かあったら。できる限りのお金は出すとのことで」

「そうだったのですか」

「はい、そういうことです」

また述べた。

「保険もあります。それで。義手のお金は大丈夫です」

「そうだったのですか」

「一人ではないのですよ」

彼もまた。このことを言うのだった。一人ではないと。

「世の中は。一人ではないのです」

「一人ではない」

「誰でも。隣に誰かがいてくれます」

こう表現してきた。笑顔と共に。

「ですから」

「そうですね」

問わなかった。頷くのだった。それだけだった。

「それは」

「そうですね。ですから貴女は」

「はい」

今度もまた頷いた。明るい声と共に。もう完全に心の中にある暗いものは消えていた。明るさが、光がその心の中に差し込み照らしていたのだった。

「二人で。何時までも」

「はい。それでは二人で」

「やっていきますので」

「では。行かれるのですね」

医師は温厚な笑顔を浮かべてまた華に問うた。それは確認の為の問いであった。

「これから」

「ええ。これから」

また言葉を告げる。それから立ち上がる。立ち上がり医師に礼を述べて部屋を後にするとそこには光平がいた。ずっと待っていてくれたのだ。

「有り難う」

その彼に対しても礼を述べた。

「待っていてくれたのね」

「そうだよ。その間漫画読んでいたけれどね」

「漫画を？」

「そうだよ。ほらこれ」

出してきたのは今流行りの野球漫画だった。少年のバッテリーが
主役の。

「これ読んでたんだ」

「これをだったの」

「読む？」

あらためて華に尋ねてきた。

「よかつたらあげるけれど」

「あげるのね」

「華ちゃんだからね」

それをまた言うのだった。神社の時と同じ笑顔で。

「だからなんだよ」

「そうなの」

「そうだよ。じゃあ行こう」

「ええ。二人でね」

「二人になる為に」

同じ二人だがその中は違う。だがそこには華が常にいる。彼女は
確かに一人ではなかった。二つの二人の中にいるのだから。

それを感じながら翔太のところに向かう。翔太はそこで眠ってい
る。そこに向かいながら、静かにその喜びを楽しむのだった。二人
でいるという喜びを。

一人より二人 完

一人より二人

2
0
0
8
・
3
・
6

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1948e/>

一人より二人

2009年3月24日09時35分発行